

「生誕 100 年 清宮質文」の楽しみ方をいろんな人に聞く「清宮質文」の歩き方 ⑤

今回は木版画家で画家の、山中現(やまなかげん)さん。



《夢の中へ》



山中現 《まど I》

「藝大助手時代、特別講義に清宮先生をお呼びしました。先生は《夢の中へ》と版木を持ってこられた。たまたま廊下に私の《まど》が飾ってあり前を通られた。無言です。でも後から奥様に聞いたら、感想をおっしゃったと！」



《スケッチ アトリエ室内 昼/夜》



《葦》



《むかしのはなし》

「昼夜の差に光への感性を感じる。《葦》では顔や手の白で光を、《むかしのはなし》では影を描いている。

《葦》の凹版(彫った線に絵具をためて摺る)と、《むかしのはなし》の板ぼかしが特徴的。斜めに彫って摺りで中間色を出す板ぼかしは木版ならではの味。凹版の鋭い線は、浮世絵にはほとんどみられない技法です。」

「技法上の制約で圧がかかる。多版を重ねる構造があり、推敲が必要だから表現を客観視できます。」



《小さな炎》



版木



《九月の海辺》

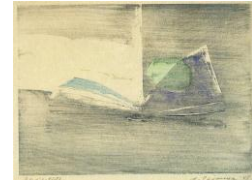
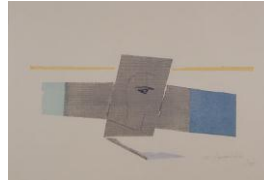


「《小さな炎》は目や火が光、背景の空間が影。とても複雑な絵肌ですがただの1版です。

《九月の海辺》は視線、手のしぐさ、魚の違いで女性と魚との親和感を出す。「埋め木」(版の一部差し替え)など制作のプロセスで考え、版と対話しています。」

《秋の午後》

《初秋の風》



《北風の過ぎた夕 (試作)》 《北風の過ぎた夕》「抽象度が高くなっている。試作をみると手前にいろいろあるのに、完成作ではすっかり整理されてモダンです。でも情感もあって大好きな作品。《秋の午後》も目はあるけれど抽象度が高い。だけど空間も感じられて。《初秋の風》も彫りと摺りを最小限におさえている。伝統的な浮世絵は平面ですが、清宮先生は同じ色面で空間を考える。空間を考えるとモノとモノとのさかいめを考える事でもあり、絵を描く時、気になる点です。反対に浮世絵と同じなのは生活体験に根差していること。日本の伝統の上に成り立った仕事だと思う。けれど足元を深く掘れば地下水脈でつながって、結局普遍に至る。真理です。」